

## 「東日本大震災記-その1-」

2011年3月11日の15時少し前(14時46分だったことが後でわかる)、東京行きの東北新幹線の車中で今までに経験したことがない大地震に遭遇した。この手記を午後20時過ぎに福島駅西口から歩いて10分ほどの福島市立三河台小学校の体育館の中で書きはじめた。

地震は、これまでに体験したことがないほど強くしかも長いもので、新幹線の車両が倒れるかと心配した。乗客の一部は少しパニックになった。私は、その時、座席ポケットにある通信販売のカタログを一生懸命見ていたところだったので、いつも地震の時にそうであるように最初の数秒間は揺れを楽しんでいた。しかし、今回ばかりは、楽しみ続けることは出来なかった。新幹線の架線を支えるコノ字型の鉄柱が物凄い振幅で揺れ続け、どこからともなく聞こえる轟音が断続的に続く。車両の揺れも尋常ではない。漁船にでも乗っているようだ。地震というより物凄い嵐が数分間襲来したような印象である。向かい側に停まっている「MAXやまびこ」もおもちゃの電車の様揺れている。車両の中で立っている人はよろめいている。

第一波が収まると、向かい側プラットフォームのキオスクの前には屋根から落ちた無数のコンクリート破片が散らばっていた。これでは、危なくて車両から外へ出ることもできない。

そこは福島駅で、ちょうど駅に停車したところに大地震が来たから、運が良いと思った。高速で走っているところに地震が来たら、ただでは済まなかったかもしれない。それにしても、福島駅周辺の建物は、遠くから見ただけでは被害がなかったように見える。あんなに揺れても大丈夫なのか、よく倒壊しないものだと感じた。

1回目の揺れの後、車内放送で宮城県が震源で、この辺の震度は6ということが知らされた。2回目の揺れがあり、また少しパニック状態になったが、他人の真似をして携帯を取り出してみると2本のEメールが来ていた。14時48分に東京に居る二女の暖から。その2分後に妻の修子から。いずれも「凄い地震だけど、大丈夫？」との、生きています？という感じのメール第1報。すぐに各々に無事を知らせると、また、すぐに返事が来た。しかし、それ以降、メールは通じなくなった。それでも、お互い無事を確認できたから良かった。東京も随分と揺れたらしい。

地震から15分後くらい経ってから、「駅舎も余震で危険なので、新幹線を降りて、駅の外に避難誘導する」との車内放送がある。皆、素早く支度をして、余震の続く駅舎を通過して外へ出た。駅の中では特にエレベーターの壊れ方がひどい。階段の途中のタイルが剥がれ落ちていたり、天井から物が落ちていたりしていた。やはり、ただ事ではないことが次第に身に染みてきた。

駅舎の外へ出ても余震は続く。駅周囲の建物や構造物は傾いてもいないが、かなりスイングしている。携帯電話をかけてもつながらず、メールを打っても送信できない。公衆電話には既に数百人が列を作っている。携帯電話やメールが通じないことは物凄く不安なの

だろう。あの人々の電話への執念は凄い。私はあの寒さの中、数時間も行列して公衆電話をかける気になれなかった。まだ、東北人になりきっていない証拠か……？

雪が降ってきた。電話が通じないので懸命にメールを打っていたら、周りにごちゃごちゃといた人たちがいつの間にか駅舎前ピロティの下に入って、私は一人取り残されていた。今回、東京行きの新幹線に乗っていたのは、次の日に高知で講演を頼まれていたため、今の状況を高知の世話人である方に早く連絡したかったのである。メールはついに送信できなかった。

身体が雪に濡れてはまずいと思い、屋根の下に入るが、吹雪模様である。皆、一様に寒がっている。余震が続いているため、駅舎はシャットアウトされている。しかし、寒い。南国高知へ行くのだからと、コートを着てこなかったもので、ありったけのものを重ね着して、パソコンを包んできたマフラーを首にグルグル巻きにした。余震の間隔が長くなってきた頃、最初の地震から 1 時間位経っていただろうか。誰かが、さりげなくバリケードされていたドアを開けて入ると次から次へと駅舎内に人が入り出した。私も 10 番目位に入って、いつでも飛びだせるドアに近いところに取り敢えず立った。駅舎の中は結構広いが、避難している乗客も新幹線の上りと下り各 1 本に在来線も合わせて千人規模だから、すぐに一杯になる。地元の高校生や大学生くらいの若者も多い。やはり風が当たらないだけで全く寒さが違う。

たびたび、かなり大きな余震が来る。若い女性を中心に悲鳴があがる。多くの人が出口に向かって走り出す。出口で「早く外に出るんだ！」と叫ぶ若い男性。将棋倒しにでもならなければ良いが、と入口を横から心配して見ていた。心配していた、というより叫んでいる男を「何の権限があって誘導しているのだ？」と陰で罵っていた。

地震発生から 2 時間位は駅前の信号も機能していなかったもので、駅ばかりか街全体が停電していることがわかった。地震から約 3 時間経つと暗くなってきたので、停電していることがよくわかる。駅舎の中を懐中電灯を持った警察官や駅員が警戒して歩き、時折、〇〇さんはいらっしゃいませんか？とマイクロフォンで聞いて回る。ドラマの太平洋戦争の空襲のシーンが蘇る。惨状はこんなものではなかったと思うが。

それにしても、あれほどの揺れで、建物も大きくは壊れていないし、怪我人も出ていない。日本の、少なくとも福島市の建物は大きなものである。それにしても震源に近い仙台周辺はどうなっているのか？近くにいたワンセグチューナーを持っているおじさんが教えてくれた。マグニチュードは 8.4 が 8.8 に修正になったこと。仙台空港が津波で冠水したこと。三陸沿岸はさぞかしひどいことになっているのであろう。しかし、どこにも連絡も取れないし、連絡も来ない。心配だがどうにもならない。

外が真っ暗になってしばらくした 19 時頃、駅前の停電は復旧した。しかし、駅舎の中は一部の自家発電の部分を除いて真っ暗である。

20 時少し前になって、駅員さんがどこかに誘導してくれるという。駅舎の中も寒くてどうなるのか、と思っていたのでとにかく駅員の誘導に従って歩いて行った。10 分くらい歩

いて小学校に着いた。小学校の校長先生だろうか、誘導した駅員さんと行き違いがあったようで、歓待された雰囲気には程遠いものであったが、体育館に案内された。体育館の中には既に地区の住民と思しき方々が数百人、4隅に置かれた大型のジェットヒーターの近くでマット運動のマット上に座り、暖を採っていた。我々「JRの乗客たち」もぞろぞろと入りジェットヒーターの暖に与った。被災者を自覚した瞬間であった。それでも、真っ暗で寒い駅舎に比べたら天国に近い。

「JRの乗客たち」の多くは、どこで仕入れたのかコンビニか何かの袋にお茶や食糧を入れて持っている。私がそれを見ても慌てなかったのは、その日、東京で泊めてもらうことになっていた高校の同級生の西村夫妻（夫婦とも同級生）にお土産に用意した3巾分くらいのパンと木イチゴジャム一瓶。遠野産ホップで仕込んだキリンビール「とれたてホップ」の中ビンを6本持っていたからであった。これだけあれば2日は暮らせる。駅舎から離れるまでは、何とか西村家に届ける、とっていたが、小学校の体育館に収容の被災者の身となってしまえば、それも叶わぬと観念し、自らの兵糧に充てる覚悟が変わった。同時に、翌日の高知での講演もキャンセルを覚悟した。しかし、電話もメールも全くダメで西村家にも高知にも、家族にも連絡は取れなくなった。

こうして書いているうちに21時を回った。とれたてホップの酔いも回ってきた。

22時頃に缶詰のパンが配給になった。先日、東京駅の自動販売機で売っているのを見て「向学のため」次の機会に買ってみなくは、と思ったので余計有難い。しかし、いつもテレビで見ている感心していたことであるが、こういう場面で決して日本人という民族は誰に言われることも無く、整然と並んで、自分のものが貰える順番を待つ。年寄り、女性には譲る。たとえ、自分の順番の前に配給物がなくなっても文句を言う人もいない。市役所の人のおとで何とかしますから、という説明に大人しく引き返す。何と美しい国民なのだろう、と改めてその列に並んでみてそう思った。

その晩の食事は、缶詰のパンは温存して手持ちのライフルーツをちぎりながら食べ、とれたてホップのつまみにした。23時頃になると毛布が配られ、これで生活の体制が整った。と思ったところ、水道管が破断して、その修理を行うために今夜は市内全域で断水するというアナウンス。飲み水もであるが、トイレがどうなるのだろう、という不安が先に立った。子どもの頃、東京都民の水ガメである奥多摩の小河内ダムが干上がり、バケツを持って給水車から水を運んだ記憶がよみがえる。飲み水はわずかで足りるが、水洗トイレは莫大な水を必要とすることをその時に「学習」した。

飲み水を空のビール瓶(1本)に確保し、その夜は意外によく眠れた。図々しきは健在か。

翌朝は6時頃に目覚めて、顔を洗うことも忘れてボーっとしていると、市役所から「JRは新幹線を含め、本日も全線で再開の目処が立っていないそうです」との連絡。これですっかり羽田経由の高知行きは諦めがついた。近くに7時頃に携帯電話で話している人が居るので、もしやと思い、岩手の妻と高知の中嶋健造さんに電話をしたら運良く通じた。中嶋さんからの情報では、岩手の沿岸は壊滅的な被害とのこと。落胆は隠せない。親しい人

たちの顔が浮かぶ。東京には依然、連絡がつかない。回線というのか、いずれパンク状態である。岩手でも東京の娘たちのその後の消息は掴めないでいるという。こういう日が来ることは覚悟をしていたが、まさか、私自身が被災者となるとは想定できなかった。しかし、元気に怪我ひとつしていないのだから、被災者といっても名ばかりか。

朝食にもパンの配給があったが、一生懸命行列に並ばなかったら、貰い損った。あとで貰うことができたが、今度は本当の乾パン。これもジャムを付ければ立派なカナッペになるかも。あとでどこかでチーズやサラミを仕入れて来よう、という気になった。こういう収容所生活では、レクリエーションが大切である。最高のビールがあって、美味しいパンもある。これにツマミをと考えるのは贅沢過ぎるだろうか？

新聞の号外も回し読みで読むことができた。「東日本巨大地震」「M8.8 死者不明者多数」のどでかい見出しと「原発半径 3 キロ避難命令」といった恐ろしい見出しや写真ばかりが並ぶ。やはり、未曾有の大惨事なのだ。それにしても沿岸の大津波による被害はやはりひどいらしい。新聞を読みながら字が涙で曇った。

昼前に暖かな日差しに誘われて、昼前に気晴らしに買い物に出た。といっても高知への旅費を立て替え、土産も買っていたので所持金は千円未満。地理にも不案内で行くあてもない。

それでも駅前に向かった。駅舎は今日も立ち入り禁止。駅舎の隣のコンビニで、野菜ジュースとチーズを買う。所持金はあと 3 1 0 円。駅の前にイトーヨーカドーがあるので、どうせ閉まっているだろうと近づいてみれば、盛んに商売をしている。クレジットカードが使えることを確かめて、思い切り買い物をした。といっても何日避難所暮らしになるかわからないし、置き場所保管場所もないので、一人分用のパッケージでミニトマト、ミニキュウリ、キンカン、小梅（小さい梅干し）、サラミソーセージ、ミニマヨネーズ、炭酸水 2 リットルと締めて 1,400 円也。ワインもあったので買おうかと思ったが、被災者の身。さすがに思いとどまった。これで食パンと乾パンがあれば 3 日位は暮らせるだろう。避難所でビストロ・ドン・ボスコを開くか。

16 時頃福島駅の JR 職員が 3 人見えて、謝罪と説明に見えた。説明といっても何も対応策がなく、会場からは、もっと誠意を示せという意見が出されたが、バスがない、そういう検討はしていない、という役所風の誠意ない回答を繰り返すばかり。数日以内にも運転再開の目処は立っていない、と言うのに代行輸送は全く考えていないとのこと。ここに 1 週間以上いなければならないのか。1 週間避難所に居るなら家まで約 300km の道程なので、中古自転車を買って 3 日こげば、何とか帰れるか……という思いが頭を回りだした。その時、収容者の一人が、郡山近くのトンネル内で 20 時間新幹線列車内に閉じ込められた乗客が、JR が準備した救援バス 30 台に分乗して目的地に向かっているという情報がある、と発言したことから状況は一変した。やんや、やんや収容者からの質問意見が続き、結果、代行輸送のバスを出すことを検討するよう上役に伝えるというところまでは回答を得た。JR の対応に失望したのか、お金のある人たちは乗り合わせでタクシーを手配し、東京方面を中

心に避難所を離れる人が目立ってきた。

19 時頃、福島駅の助役（今は副駅長というらしい）が部下を従えて現われ、「今日は無理ですが、明日か明後日までにはバスでの輸送を何とかしたい」ということが伝えられた。やればできるのじゃないの！という声は私の独り言だけではなかった、と思った。

その晩は、塩おにぎり 2 個とペットボトルのお茶が支給された。贅沢は言えないが、温かいものが欲しい。味噌ラーメンが頭に浮かぶ。私は、ビールとパンがあるからまだまだ恵まれている。

次の朝、被災後一回も着替えをしていないことに気付き、下着を着替えようと思ったが、着替えの場所はトイレしかない。かなり汚れてきているトイレの状況にためらいがあったが、何とか着替えた。野郎はともかく、女性や子ども連れの人には更衣室が必要だと思う。朝食として菓子パン 1 個と水のペットボトル、それと「福島原発が爆発」という見出しの号外が配られた。放射能汚染への心配がヒソヒソと話されるようになり、タクシーを手配して出発する人が次々と続く。9 時前に JR の担当の方々が現れ、「バスの手配ができましたので、9 時半頃から順次、それぞれのご希望の方面にバスを出発させますので準備をお願いします」という。体育館全体で拍手が起こった。「待てば海路の日和あり」である。救援バスの人となり、思いがけず日本海側をバスの旅をさせてもらったうえ、その 10 時間後には JR の乗車駅である真っ暗闇の新花巻駅に戻った。21 時には、やはり停電で真っ暗闇の自宅に戻ることができた。

福島市役所の職員の方たちには本当に世話になった。JR の対応も最終的には素晴らしかったと評価できる。この不埒ではあったが 2 日間の避難所暮らしでいろいろなことを学ぶことができた。

この貴重な体験をこれから始まる県民の復興支援に活かしていきたい。